

自然と人間との共生

KOSMOS

第17号

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会



EXPO'90
FOUNDATION

こすもす

2026

春

供養する心、 いのちの連環

「草木塔」
共生につながる
供養の精神



2 [巻頭特集]

供養する心、いのちの連環

「草木塔」共生につながる供養の精神

3 [対談]

草や木や生き物を
供養する日本文化
赤坂憲雄 × 吉川成美

11 [探求コラム]

赤坂憲雄
鵜飼秀徳
中井章太

14 [私を育てたく風と景>]

私の宝石箱であった
田辺の海
長谷川真理子

16 [いぶきの輪っか]

花を手向ける原点
湯浅浩史

18 [近代学匠伝]

2002年コスモス国際賞
受賞者
チャールズ・ダーウィン
研究所

21 [日本植物紀行]

はかない雪のような
「日本のエーデルワイス」
ウスユキソウとその仲間

22 [協会事業紹介]

普及啓発事業
万博の桜2025

24 [日本の伝統園芸植物]

椿
日本の文化と精神に深く根付く
世界に誇れる、優美な伝統花木

[写真]東北の田園風景(山形県高島町)

「巻頭特集」

供養する心、いのちの連環
「草木塔」共生につながる供養の精神

供養の基本は、自分を生かしてくるあらゆる存在への感謝と敬意にある。それは神仏や人に限らず、自然や動物、さらには日々使っていた物にまで及ぶ。本号は、我々がホロンとして、自然、社会、歴史、他の命とつながり、相互に関係しあいながら共生していることを、草木塔を通して見つめる。

草や木や生き物を
供養する日本文化

それぞれの原風景、
研究の出発点

吉川 私は早稲田大学で原剛先生が主宰される早稲田環境塾におりました。その時に「東北を学ぶ」というテーマで、山形県高島町で「フィールドワークを重ねたことが、農業経済学の道へ進む原点となっています。高島町に通う中で、有

民俗学者

赤坂 憲雄

対談

農業文化人類学者

吉川 成美



対談が行われたのは東京・築地。ここには全国的にも珍しい「供養塚」で知られる波除神社があり、今回のテーマとも深く結びついている



手書き文字でびっしりと書かれた「たかはたりんごだより」。紙面から熱意と温かな人柄が伝わる

機農業の先駆者であり、詩人の星寛治さんとも出会いました。星さんは「たかはたりんごだより」というニュースレターを yourself でお書きになっていて。毎年のりんごの実りがどうだった、から始まって世界の貿易の中で日本の農民がどうなっていくのか、宮沢賢治から脈々とつながる考え、農民運動の原点みたいなものをずっと根底に持っておられた。それが私たち都会の人間を救ってくれるような存在になっていったんですね。
赤坂 私は直接、高島町に入っていたわけではないのですが、星さんとは「真壁仁研究」という雑誌を通してお付き合いがありました。真壁仁さんをはじめとして戦前から「農民詩人」と呼ばれる人々は多くいました。しかし星さんの世代は、表象としての農民ではなく、実践としての農民でした。有機農業を広めながら、外か

ら来る若者を受け入れ、生活の場を開いていく。その姿勢を、私は敬意をもって眺めていました。

吉川 今日のテーマである「草木塔の心」を考えると、その生き方の延長線上にある自然と人間の関係を、長く問い続けてこられたのが赤坂先生だと思っています。だからこそ、ぜひ先生とこのテーマについてお話をしたいと思っています。

赤坂 私も楽しみにしております。

野生と文化を分ける思想を超えて

吉川 今、「人新世の資本主義」という言葉が盛んに語られるようになりまし。無限の利益を追求する人類の経済活動が地球規模の変化を引き起こし、地質や生態系にまで影響を与えていることです。東北の地で大地に向かって生きてきた人々からすると、それはある意味で「いまさら」という感覚もあるのではないかと思うんです。戦後、日本は経済一辺倒で発

展してきました。その中で消えていきそうになっていく生き物や風景、山岳信仰、暮らしや文化があります。

赤坂 吉川さんが早稲田環境塾でやっていらつしやった環境日本学というのは、まさに、そこに目を向けようとする学問ですね。

吉川 経済の論理のなかで見えなくなってきたものを、もう一度見つめ直す。その橋渡しをするのが、私たち研究者であり、星さんのような実践者だったのではないのでしょうか。星さんが亡くなられたことは本当に残念ですが、その分、私たちが役割を担っていかなければならぬと感じています。

赤坂 奥会津では、「農業とは何か」を根源から問い直すような実践が始まっているんです。水田農業ではなく、山野草を季節ごとに集めて出荷することを、市場との物流プロセスをつくりながらやっている。面白いのは肥料を与えないんです。肥料を使う農業の限界に挑戦しているわけです。山野草ですから新たな栽培ではないんです。でも栽培の始まりのような



赤坂 憲雄(あかさか・のりお)
民俗学者。1953年東京都生まれ。1978年東京大学文学部卒業後、東北芸術工科大学教授として東北文化研究センター設立に携わり、1999年に雑誌『東北学』を創刊して東北学を提唱。2007年『岡本太郎の見た日本』でドゥマゴ文学賞、同作で2008年芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。著書は『東北学』忘れられた東北』『異人論序説』『境界の発生』ほか多数。

ことを実践するんですね。それは人と自然との関係、農業って何なのかを問いかけることになります。

吉川 それは本当に魅力的な問いかけですね。私自身が農業経済学に興味を持ったきっかけも、水や肥料を極力与えないで育てる永田農法に出会ったことなんです。たとえば野生種のトマトは、もともと非常に小さくて酸味が強い。私たちがふだん食べているトマトとはずいぶん違いますが、永田農法では植物が本来持っている力を引き出そうとするんですね。人間にとって都合の良い環境をつくるというより、植物が快適な環境とは

何かを考えるんです。野菜の原産種というのは、人間の壊した野生について考える手がかりになると思っているんです。

赤坂 野生種といえば、佐藤洋一郎さんに連れられラオスで古い野生の稲を栽培している場所に行ったことがあります。驚いたのは、貴重な野生種と言いつつ、すぐ横で水牛の体を洗ったり糞を流したりしていること。そこに囲いがないんです。逆に、囲った場合は枯れてしまったらしい。つまり、現代まで生き残っている野生は囲い込まれるとダメなんですね。我々はどこかで、文化と野生とい



山形県山形市山寺の立石寺にある、芭蕉の句碑。芭蕉がこの山寺を訪れたのは1689年と伝えられる。そばには芭蕉と曾良の像も佇む



芭蕉が句を詠んだ場所とされ、のちに弟子たちが芭蕉の残した短冊を埋めて塚を建てた「せみ塚」

う二元論に縛られている。野生の稲は守らなければならぬが、人間が守ることで壊れていくケースもある。山野草の実践もそうですが、野生を人間の暮らしから切り離して囲い込み、保護すべき対象として扱うのではなく、人間との行き来のなかで維持されてきた存在として、考え直す必要があるのではないだろうか。

吉川 文化と野生を分けるのではなく、その間の関係の中で捉える必要があるということです。人間は自然から切り離されて存在しているのではなく、自然のいのち

をいただきながら生きています。その自覚があるから草木や動物に対しても、ただ利用するのではなく、何らかの応答をしようとする。それが、日本における供養という営みに結びついているのではないのでしょうか。

供養の感性と

「あわい」の哲学

赤坂 以前、あるシンポジウムで発表させていただいた時に、蝉の声を話したことがあります。私たちは「蝉の声」と言いますよね。



吉川 成美(よしかわ・なるみ)
農業経済学博士。総合地球環境学研究所・上廣環境日本学センターセンター長・特任教授、県立広島大学大学院教授、総合研究大学院大学先端学術院教授などを兼任。CSA(共生型農業)などの国際ネットワーク形成や、自然と人間の関係を再考する「環境日本学」の普及・教育に寄与。主な共著は『クライメート・チェンジー 新たな環境倫理の探求と対話』。

でも西洋の人々にとってはノイズだそうなんです。松尾芭蕉の「閑けさや 岩にしみ入る 蝉の声」という句も、声なんです。研究によれば日本人は蝉や虫の声を言語脳で受け取っているらしい。

吉川 形なきものの形を見て、声なきものの声を聞くっていう西田幾多郎氏の言葉を思い出します。私も「古池や 蛙飛び込む 水の音」の句を学生に紹介するのですが、脳内でどんな音が聞こえましたか?と問うと、みな口々に「ぼっちゃん」と言うんです。このオノマトペは日本独特のものなのかしらと思ったりします。

赤坂 宮沢賢治の作品もオノマトペだらけですよ。植物や虫、動物、山などの自然が囁いている言葉や声に耳を傾け、言語化している。欧米の学者は、擬人法なんです。ゴリラは人のように賢いとか、クジラは気高いとか。

吉川 日本人は、人間以外の生き物に自分を入れ替えるような感覚がありますよね。能の「芭蕉」という演目もそうだと思います。芭蕉の精が僧に向かって「私は植物だけれど、成仏できるのだろうか」と問う。そうすると「なぜ植物が成仏できないことがあるのか」と語られる。そこから「山川草木悉



高島町上和田にある草木塔。建立年は不明だが、風化具合に時間の経過が見てとれる



上杉謙信を祭神として建立された、山形県の上杉神社にある草木塔



高梨利右衛門を顕彰するために建立された巨大な「酬恩碑」。高島町立二井宿小学校の校庭にある

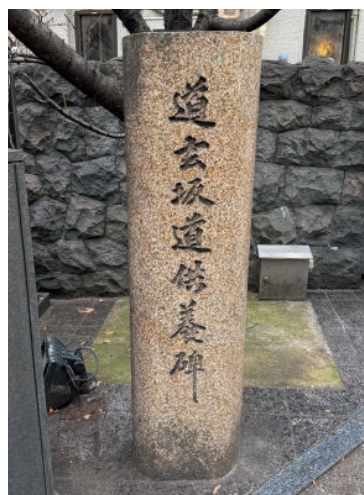
真ん中が大事だと。これは「容中律」といって「間」を認める東洋的思想です。自然と向き合った時にお互いが浸透し合う感覚。**赤坂** 自然より人間が優位であるとかが全くなくなる。その「あわい」に私たちは立っていないかもしれない。

草木塔が刻む 永遠の時間と祈り

吉川 草木塔というのは、草や木の供養のために建てられた石塔ですね。人間の死者を弔うのではなく、草木のいのちに向けて刻まれた碑が、各地に残っています。**赤坂** 草木が単なる資源ではなかったからでしょう。山から伐り出した木、畑で刈り取った草。人の暮らしを支えるために、そのいのちをいただいたてきた事実を忘れないために、石に刻んだ。おそろく木材を大量に切り出した時なんか、最初は土木に関わる人々が奉納したんだろうと思いますが、碑文を木に刻むことがないのは不思議ですね。**吉川** 先生その問いは、あるようではなかった問いですね。なぜ木ではないのかと。**赤坂** 例えば、山形県の遊佐町や

新潟県村上市などでは蛙の千本供養塔っていうのを木で建てるんです。蛙が千匹取れた時に、卒塔婆のようにして奉納する。木だからどんどん朽ちていく。確かに、蛙の供養を石ですることはしませんね。やはり石の塔を建てるということ、ある種の時間的な永遠性みたいなものを思い描いている。奪ったいのちの記憶をすぐに消してしまうのではなく、時間をかけて受け止めていく営みでもあるのでしょ。字が読めなくなる頃には、奪ったという記憶も薄れていくかもしれない。しかし石はそこに立ち続ける。

吉川 まさに人と自然の「あわい」に立つ標しるしのような存在ですね。**赤坂** 岩手県の遠野市も石塔石碑が非常に多い土地なんです。おそらく出羽三山の修験の流れもあるでしょう。草木塔と神道の間関係も、私はあると思っています。**吉川** 高島町の置賜地方にたくさん草木塔がありますが、採石されたままの高島石で作られているものもあります。貴重で高価なものなんですよね。だから当然、それは人の供養にも用いられるわけで、高島町立二井宿小学校の敷地には「酬恩碑」があります。米沢藩の年貢に苦しむ農民のために幕



東京都渋谷区にある「道供養塔」は全国でも珍しい供養塔。隣接して与謝野晶子の歌碑や道玄坂の由来を書いた石碑もある

皆成仏（天台宗では草木国土悉皆仏性）」という思想につながっていきます。あの作品を読むと私は、僧ではなく芭蕉の側に立ってしまっています。学生や子どもに読み聞かせていても、みんな芭蕉の気持ちになっっている表情を見せる。異なる存在に変容することができ——そうした感覚が日本人の文化にあるのではないだろうか。**赤坂** 山形県山形市山寺の立石寺境内に「閑さや岩にしみ入る 蟬の声」の句碑がありますが、この近くに「せみ塚」があるんです。**吉川** ありますね。**赤坂** 蟬塚をはじめ、日本には塚という供養の碑が非常に多いです

ね。人間以外の存在を弔うというか、自然への畏敬の念が自然にあるからでしょう。奥会津では、カメムシのことを「お姫様」とか「お嬢様」と呼ぶんです。捕まえた手のひらにそっと乗せて外に出してやる。そうすると臭くない。攻撃的に扱わなければ臭いを出さないんです。カメムシを人間のように賢いとか美しいとか思っているわけではない。でも「お姫様」と呼びかける。**吉川** その向き合い方も、欧米の姿勢とは異なるように思います。**赤坂** 山口県の詩人、金子みすゞは「大漁」や「鯨法会」という詩を書いていますが、まさに鯨の視

点ですね。たとえば「沖で鯨の子がひとり／その鳴る鐘をききながら／死んだ父さま、母さまを／こいし、こいしと泣いてます」のような一節がある。山口県長門市の向岸寺には、捕らえた鯨の種類や場所に加え胎内で死亡した子鯨を丁重に葬った記録として「鯨鯢過去帖」を残しています。**吉川** それも供養のひとつの形ですね。**赤坂** 供養というと仏教的な概念を思い浮かべますが、故・梅原猛さんが言われたように、その底にあるのは、山も川も木も草もすべてに神が宿るアニミズムに通じる自然観ではないでしょうか。



向岸寺に伝わる「鯨鯢過去帖」。長さ671.7cm、34折の折帖で、1804年から1837年にかけて捕獲された鯨の記録と戒名が記載されている写真提供：長門市

吉川 登山家で文化人類学者の故・今西錦司さんは自然というもの、意識の世界と無意識の世界の中間的な存在だと述べています。ある場所に石碑を建てたり、供養塔をつくるのは、その「中間」に呼応しているのではないのでしょうか。人間のいのちと、植物や動物のいのち、さらにはこの世にない存在：妖怪や怪異といったものも含めて、実体のあるものとなないものが入り混じりながら生きている。私が勤務する上廣環境日本学センターでは、これを「あわいの哲学」と表現しています。二項対立の

府に直訴し、命を落とした高梨利右衛門を顕彰する碑です。この酬恩碑も高島石でできています。岩から切り出した石を下ろすとき、女性たちが自ら髪を切り、その髪で石をくくって下ろしたという伝承が残っています。縄ではなく、髪で。

赤坂 そういふ伝説があるんですね。単に記念のためではなく、石を下ろす行為そのものが供養であり、祈りなんですよ。石碑つな



南三陸町に伝わる鹿子躍の風景。2.7mのササラ、伊達家より拝領の九曜紋や輪違紋が染め抜かれた衣装、鹿の角などをまわって踊る

がりです。少し話を広げると、宮城県南三陸町に、震災で壊滅した湾沿いの高台に石碑が残る漁村があるんです。ここは民俗芸能として鹿子躍ししおどりを守ってきた土地なんです。その鹿子躍の供養塔というのがあるんですね。

吉川 鹿子躍を供養するということですか？

赤坂 鹿子躍を供養するのではなく奉納するのですが、生きとし生けるものすべてのいのちのために祈る場として、そこには石碑が置かれていて、やはり石なんですよね。

吉川 墓石のまわりでは、人々は手を合わせるだけでなく、石を撫でますよね。よしよし、と語りかけるように。草木に対しても同じ気持ちがあるのだと思います。その瞬間、ずっと草木の側に立っている気持ちになる。今は、たまたま人間としてここにいて、けれど、そういうような感覚です。

赤坂 その感覚は確かにありますね。

吉川 それで慰められるんです。

赤坂 供養という現場は、生と

境界線を編み直すという未来へ

吉川 赤坂先生は「ユリイカ」で「怪物たちの食卓」という連載をされていてよかったですね。毎回、楽しみに拝読していました。

赤坂 人間の業に踏み込んだ話でしたが、怖くはなかったでしょうか？

吉川 まさか。草木塔の話とも通じるところがあると感じたのです。人間の中には、どこかトランスしていく部分があって、悪くすると「怪物」にもなり得る。けれど暮らしの中にある供養文化など

怪物たちの食卓 物語を食べる

「ユリイカ」の連載をまとめた書籍。人は何を食べるのか、誰と食えるのか、そして何に食られるのか。食についての深遠な思考が巡らされた魅惑的なエッセイである『怪物たちの食卓：物語を食べる』(青土社) 著者：赤坂憲雄

死が交換される場所なので。人は生きるために草木や動物のいのちを奪う。その痛みを、そのままにはしない。供養という文化的な仕掛けによって長い時間をかけて浄化するのです。刻まれた字が読めなくなる頃には、奪ったという記憶も薄れていく。成仏という言葉がありま



使い古した針への感謝と裁縫の上達を願う針供養の場「針塚」(香川県丸亀市弘聖寺)。最後には豆腐や蒟蒻といった柔らかいものに針を刺し、休ませよう



神奈川県藤沢市の遊行寺にある「敵御方供養塔」(国指定重要史跡)は、上杉禅秀の乱(1416年)で戦死した者や軍馬を敵味方なく供養するため建立された



すが、木では少し早すぎる。だから石なのでしょう。

吉川 石じゃないといけない。それが問いの答えですね。人間は時間の中で許され、安らいでいくのだと思います。トボス(場所、場)が石碑によって生まれるし、そこにエートス(行動様式、習慣)が埋め込まれていく。

が暴走を止めてくれるのではないかと。それは農業にもつながっています。集落を営む際、あらゆる場所に神様を祀り、水田稲作を行う。葉山信仰や深山、奥山信仰があり、先祖が見守ってくれている。それで毎年、田の口開けをするわけですね。水を張ったら耕してもいいかとお伺いを立てて、よしと言われて耕していく。その延長線上に草木塔があるんです。暮らしの中の神々という感覚を、今の世の中でどう持てるのか。その時、やはり身近な「食」から考えることができるのではないかと思うのです。「怪物たちの食卓」にも書かれています。が、「食べる／食べられる」の関係は私たちが家畜を飼ったり農業を行う中で、当たり前のように営んできました。

赤坂 たとえばヨーロッパの供養とされるのは家畜で、自分の財産なんです。でも日本における供養の対象となるのは、山野の生き物なんです。神様に捧げる生贄もウサギだったりシカだったりトリだったり。その違いは大きい気がします。

吉川 とはいえ今の日本社会でクマの問題などを見聞きすると、そうした感覚を守れるのか不安になります。クマの供養をしようという気持ちが生まれるのか。

赤坂 供養というのは少し曲者である、日本思想史の中村生雄さんが指摘しています。飲食店のかに道楽が蟹供養をしている。うなぎ屋さんのうなぎ供養もある。

吉川 焼き鳥屋さんも鳥供養とかやっていますよね。

赤坂 供養という文化的な仕掛けを、自分たちの自然破壊や動物殺しを正当化する理由にしてはいけなないと思います。これからの話として、人口の問題がありまね。今、約一億二千四百万人いる日本の人口は急速に減っていき、百年後は江戸時代に近い四千万人ほどになるでしょう。その規模において、人と自然の境界線みたいなものがあり、それを明治以降に押し広げてきて今が最大だと思えます。今では奥山と村や町が隣り合っている、野生動物との遭遇も増えています。

吉川 そうですね。



和歌山県の加太にある淡嶋神社は、全国でも珍しい「人形供養」で知られる。境内のいたるところに、びっしりと人形が並び、その数は約二万枚

赤坂 明治以降、山野を私有として囲い込んできましたが、もう囲い込みに疲れてしまつて放棄し、荒れていく。かつての里山が緩衝地帯として機能しなくなり、奥山と町が直結しつつかあるんです。

吉川 どこかで里山の緩衝帯を、新しい時代の形で創造すべきですね。

赤坂 それはコモンズだと思えます。入会地、共有地をどう再生し、再編していくのか。将来の大きなテーマになるでしょうね。山形で聞いた話ですが、戦後の食糧難時代に人々がコモンズの山に

入って木や草を刈って火入れをして、蕎麦をまいて生き延びた。忘れられたコモンズを再発見し再編する。野生との境界線を引き直す時に、新しい共有地「コモンズ」が生まれてくる。たぶん、石塔が建っているのは、みんなそういう境界の場所なんですよ。

吉川 「気をつけて、ここから奥に入るから」ということで、お年寄りには奥山に入る時に手を合わせますよね。そういう場所の持ち方が、これからはますます必要になる気がします。土と切り離して生きられないということ、自覚しなければならぬ時代が来る。土と人間を分けるのではなく、溶け込んでいくような一体感、曼荼羅のような生き物たちの賑わいの中で生きる、ということ。私の周りでも、都心を離れて自然のあるところで子育てしたいという人が本当に増えました。緩衝地帯のような場所でも子どもたちを育てたいという思いを受け、私自身も教育プログラムを開発していて、フィールドワークで親子を滝に連れて行ったりしています。自然の

滝は人工的な打たせ湯と違いリズムや水量が一定じゃない。当たっているといつの間にか自分が滝そのものになるような瞬間が訪れて、誰もがすっきりして出てくる。今だからこそ、圧倒的な自然体験を教育の中に入れていきたいと思っています。

赤坂 遠野でも、都会から来た若者が「鹿踊り」をやっています。「鹿になる」体験を通して何かを得られるのでしょうか。自然と文化する体験が、これから大切な文化の仕掛けになっていくかもしれないですね。僕は昨年、雑誌に「宮崎駿の詩学」という連載をしました。宮崎駿さんの作品を、仏教の地水火風空という世界観で読み直してみたいんです。地水火風空を追いかけると、すごく面白い。コスモスというか、ある種の世界観、哲学を再体験できました。偶然にもこの『KOSMOS』でも今後の編集テーマとして土、水、太陽と月、火等を考えているとのこと嬉しいですね。

吉川 日本文化の中で、アニメーションは強いパワーを持っている、

世界中から注目されています。その中に、地水火風空のような、命の源が描かれている。世界中の若者たちにとっても、そこに示唆があるのだと思います。

赤坂 宮崎さんは意識せずに、それをやっているのです。

吉川 アニメーションには「アニメ(魂)」という言葉が入っていますね。擬人化ではなく、魂化する、アニメ化する、ということなのかもしれません。

赤坂 アニミズムという言葉は十九世紀にタイラーがつくって、

当時は野蛮だとか未開だとか否定的に使われた。でもそれを僕たちの足元からもう一度取り戻す、回復するような研究や思想が今後、現れてくるといいですね。

吉川 同感です。このロゴスの世界から少し解放されて、感性という部分もこれからの学問領域で重要視されれば良いと思っています。日本が培ってきたオノマトペの世界やアニミズム・供養の文化が可能性を広げてくれると確信しています。



東京・築地にある波除神社には「すし塚」「玉子塚」「海老塚」「昆布塚」など、かつて人々の食を支えた築地らしい供養塚が並んでいる

探求
コラム

1

供養と供犠

赤坂 憲雄

民俗学者

二つの違いから 人類の文化を読み解く

中 村生雄さんの『祭祀と供犠』（法蔵館文庫）という本は、すでに「古典」なのかもしれない。わたしはその文庫版に「供犠」という問題系の深みへ」という解説を書いてる。供養や供犠について思いを巡らすときには、いつでも戻ってゆく研究書である。この対談は『祭祀と供犠』をかたわらに読まれてほしいと、ひそかに願っている。

たとえば、レヴィ＝ストロースは『野生の思考』のなかで、犠牲の神聖化によって人間と神とのあいだに関係を確立し、その同じ犠牲を破壊することによって関係を断ち切る、それが供犠であると説明している。これに対して、犠牲獣の破壊ではなく共食に重点を置く供犠では、犠牲を共同体の内部

に回収することをめざしている、と中村さんは指摘する。そして、日本文化には、神に生け贄として動物をそなえる供犠の片鱗は認められるが、大きな流れとしては、動物をそなえるイケニエ祭祀から穀物を神饌とする農耕祭祀へと移り変わってきた。そこには、一神教と多神教をめぐる社会文化的な差異や葛藤が認められるのかもしれない。

人類の文化は、動物殺しの罪責感を解消する方法にしたがって、二つに大別される、と中村さんはいう。ひとつは、神から人間に贈られた動物を生け贄として殺して神に返礼する供犠の文化であり、そこでは動物殺しという人間が負うべき罪は、神の権限を導入することで一挙に解消される。むしろ、キリスト教的な一神教を背景とする。いまひとつは、動物を人間のアナロジーで捉えて供養や鎮



『祭祀と供犠
日本人の自然観・動物観』
(法蔵館文庫)
著者: 中村 生雄
解説: 赤坂 憲雄

魂の対象とする供養の文化であり、そこでは動物殺しの罪責感を少しずつ浄化しようとする。多神教的な風土が背景に見え隠れしている。

大切なテーマであり続ける アニミズム的精神の言語化

中村さんはここで、いまも多様化しながら見いだされる供養の文化を再構築する必要性は認めながら、それを錦の御旗のようにして、西洋的な人間中心主義イデオロギーに対抗しようとするような「誤認」は斥けている。そもそも、その優劣を論ずるのは無意味であるからだ。それにしても、供養文化の前提にはアニミズムがある。『祭祀と供犠』には、「アニミズム

的生命観が優勢であった古代社会にあつては、人間のいのちと動物のいのちは根源において別ものではないし、それは山野河海の自然のいのちとも目に見えないつながりをもっていると考えられたのだ」と見える。ただ、そうした古来よりのアニミズム的な精神風土について、きちんと言語化することはむずかしく、われわれ自身に課せられた大切なテーマであり続けている。

あかさかのりお
民俗学者、作家。東京大学文学部卒業後、東北芸術工科大学助教授、学習院大学教授を務める。東北学を提唱し、雑誌『東北学』を創刊。『遠野／物語考』『性食考』『ナウシカ考』『民俗知は可能か』『岡本太郎の見た日本』など著書多数。

探求
コラム
2

自然への贖罪と感謝が、そこには込められている

鴉飼 秀徳 正覚寺(住職)

**動物も虫も草木も
吊いの対象に**

幼 いころ、カブトムシや金魚を庭の隅に葬り、小石を墓標に手を合わせた記憶を持つ人は少なくないはずだ。日本人は人間だけでなく動物や虫、さらにはモノにいたる、ありとあらゆるものを吊ってきた。

たとえば実験動物の慰霊碑は、大学や研究所の片隅に必ずと言ってよいほど建てられている。医療や生命科学の進歩は、数え切れない



北海道・手稲山口にある「バッタ塚」

いマウスやサルやサルの犠牲の上にある。そのことを可視化し、毎年の慰霊祭で研究者自身に問い直させる装置が供養塔である。

目線を昆虫に転じれば、全国に点在する「虫塚」がある。北海道に残る「バッタ塚」は、明治期にトノサマバッタの大量発生が開拓民の畑を食い尽くした際、大量の卵や成虫を焼いて埋め、土饅頭状に固めたものだ。それは害虫を徹底的に駆除した証であると同時に、大自然を畏れ敬う複雑な心情が刻まれている。

そして、吊いの範疇は植物にまで広がる。山形県米沢地方では、十八世紀後半以降、山林伐採や河川改修のたびに「草木塔」が建てられた。木流して山を削り、川筋を変えざるが、人間の繁栄と表裏一体で自然を傷つける行為であることを、人びとは直感していたのだろう。

石碑には、しばしばこのような仏教思想が刻まれている。「一佛成道 観見法界 草木国土 悉皆成仏」。つまり、「悟りを得てこの世界を慈悲の光で照らせば、草木や国土、この世のありとあらゆるものが成仏できる」という。

草木塔は、地域の造園組合などが寺院の境内などを借りて建立してきた。造園家はときに樹木を伐採し、そのいのちを奪う。また、樹木の剪定や植樹を通じ、生業がたてられているという感謝の気持ちも持つ。草木塔の一種として、華道関係者が施主となった「花塚」も各地に存在する。

一九九〇年の「国際花と緑の博覧会」が掲げた理念は「自然と人間との共生」であった。山形県のパビリオンでは草木塔が展示され、その存在が再評価されるきっかけになった。同時に、「草木国土」にたいする「いのち」への意識が芽生えた博覧会だったといえるだろう。

逆説的にいえば、近代以降の日本社会は、しばしば自然を一方的に「消費」してきた。その結果としての気候変動や生物多様性の喪失という課題に突き当たっている。私たちは今いちど、草木塔や虫塚、動物慰霊碑といった「小さな記憶装置」が伝える声に、耳を澄ませる必要があるのではないか。

草木塔を始めとする多くの供養塔は、いのちの犠牲なしには成り立たない社会を前提としつつも、「いのちを無駄にはしない」「吊いを通じて戒めとする」という、決意の証でもある。野に立つ一基の草木塔の前で足を止めてほしい。そして、自然と人間との関係を深める一助にしてみたいと願うばかりである。

うかい・ひでのり
一九七四年生まれ。浄土宗僧侶でありジャーナリスト・作家。現在は正覚寺住職を務める傍ら、『宗教と社会』をテーマに取材や執筆を行う。『死の講義 二十歳の死生観思考を言葉にする手法』は、はじめ著書多数。

探求
コラム
3

森との対話

中井 章太 吉野町長・山守

**山の神様、木や森に
感謝を捧げる儀式**

私 は、奈良県吉野の山守です。山守とは、山林所有者から山の管理を任せられ、育林・伐採・販売までを担う、地域に根ざした林業経営の担い手です。私は七代目の山守として、約二百ヘクタール(東京ドーム約四十三個分)の山を守り育てています。

吉野地方には「山入り」と呼ばれる習わしがあります。山仕事に入る最初の日、すなわち木を伐る最初の日に、お酒や塩を供え、山や木への感謝と祈りを捧げます。しかし、すべての木に対して同じように供えを行うことは現実的には困難です。そこで、その想いを常に携えるために、道具に祈りの印を刻んできました。その道具が「ヨキ」と呼ばれる斧です。



左に三本、右に四本の溝があるヨキ

ヨキには、左側に三本、右側に四本の溝が刻まれています。三本の溝は「ミキ」と呼ばれ、御神酒を意味します。四本の溝は「ヨキ」と呼ばれ、「地・水・火(太陽)・風(空気)」という、植物の生育に欠かせない四つの要素を表しています。この溝を刻むことで、山の神々への感謝と供えの心を常に道具に宿し、山に入るたびに祈りを携えて仕事に向き合うのです。

また、この溝の由来については明確には分かっておらず、各地にさまざまな伝承が残されています。危険と隣り合わせの山仕事の中で、「身をよける」という願いから、「身」三、「避ける」四」とする言い伝えや、溝それぞれに異なる神々を宿し、八百万の神々の加護を願うとする地域もあります。

さらに、三本の溝を生物の循環を表す「生・旺・墓」とし、陰陽五行の「三合の理」に通じるとする説や、「七つ目」「脂抜き」「流し目」といった呼び名とともに、山の神・火の神・鉄の神を象徴す

るとする考えもあるようです。あるいは、三本に伊弉諾尊・天照大神・伊弉冉尊、四本に八幡大神・春日大神・豊受大神・猿田彦大神を配するという解釈もあります。

興味深いことに、伐採後の木材を加工する斫り斧や大工斫には、このような溝は見られません。つまり、この溝は単なる機能ではなく、「山に入る者の祈り」を刻んだものだと考えられます。

古来より人々は、斧に刻まれたこの溝にさまざまな意味を見いだし、木の命や山の恵みに対する感謝と畏敬の念を重ねてきました。森と向き合い、森と共に生きてきた日本人の精神性——自然を敬い、その中で生かされていることを忘れない心が、こうした道具の中にも静かに息づいているのです。

なかい・あきもと
奈良県吉野町生まれ。大学卒業後、ハウスメーカー勤務を経て家業の林業を継承し、吉野林業の再生を目指す。二〇〇七年に社団法人吉野青年会議所の理事長、二〇〇九年に吉野町会議員、そして二〇二〇年に吉野町長就任。

幼少期の記憶のなかの景色、人生のターニング・ポイントにまつわる思い出の場所、風の匂い、聞こえる音楽、ふと脳裏に浮かびあがる「心象風景」……。大切な「風と景」について語っていただきます。



和歌山県田辺市の海岸。元嶋神社の海上鳥居は大正時代に建設されたもので、潮の満ち引きで表情を変える美しいスポットとして知られる

私の宝石箱であった 田辺の海

長谷川 眞理子 独立行政法人日本芸術文化振興会 理事長

二 歳になったばかりの頃、母が結核になって入院してしまった。父は仕事で忙しいので、私の世話はできない。そこで、私は親戚の家にあずけられることになった。

三 歳になる直前ごろ、母が治るまでの間、私は和歌山県田辺市の家で暮らすことに決まった。そこには、父の両親と姉妹とその子が住んでいた。つまり、祖父母と伯母たちといとこである。いとこは十二歳年上の男の子で、私にとっては「いいお兄ちゃん」だった。

美しい生き物との出会い

この家は海に近かったので、夏になると、祖父に連れられてよく

泳ぎに行った。また一九五〇年代のことだから、田辺の海にはテトラポッドも何もなく、磯あり砂浜ありで松の木がしげり、本当に美しいところだった。これが私の原風景である。

この海で見た貝やイソギンチャクなどの生物がなんと美しかったことか。さらに、家の裏には川が流れ、山もせまっていた。こんな自然の中で見た生き物たちは、昆虫も植物もすべてが美しく、幼い



幼い頃の私。祖父母の家の庭は豊かな植物が咲き乱れ、海岸には多彩な海の生き物がいて、自然と戯れる日々だった

私にもエレガントに思えた。祖父は盆栽が趣味で、庭にはたくさん鉢植えの植物があった。このときの生物の印象が、私を進化生物学者にしたと言える。

父の二人の姉妹のうち、姉の方の伯母は、中学校の家庭科の教師をしていた。そして、芸術家肌で、押し絵などのいろいろな作品を作っていた。また、彼女はとても洒落な女性だった。私の服の趣味や色のセンスなどは、この伯母ゆずりのところが大きいと思う。

小さな図鑑が広げた世界

この伯母が持っていた小さな図

鑑がまた、私を生物学に仕向けた小道具の一つである。昆虫から植物から貝類から、なんでも載っている博物学的図鑑で、私はこれを見て、私が愛でていた生物にはすべて名前が付けられ、研究されていることを知った。

結局のところ三年後には母の病気が治り、両親が私を迎えに来た。私を祖父母の家にあずけた父は、東京に帰ったあと一度も田辺の家を訪ねては来なかった。なんと私は三年間まったく両親に会わなかったのだ。おかげで母の顔はすっかり忘れてしまった。三年ぶりに母に会ったとき、「あの

きれいな女の人は誰？」と言って、母を泣かせたそうだ。

田辺の家にあずけられた当初、小さい私は家中を歩き回って「パパはどこ？」と聞いたらしいが、やがて父を探すことはやめ、自分はこの家の子だと思ってしまうようになった。そして、祖父母と二人の伯母といとこに囲まれ、本当に幸せに暮らした。全員が私を心底愛してくれ、近所の人たちや保育園の人たちも、「東京からやってきた可愛そうな眞理子ちゃん」を可愛がってくれた。

小さいころの家庭の事情がもたらなくなってトラウマをかかえる人たちがいる。私の経験は、見方によってはかなりひどいものだったの

だろうが、私としてはそんな思いはない。それは、私が田辺の家で愛されて、安心して暮らせたからだろう。一言言えるとしたら、私はかなり諦めがよい方だと思うのだが、それは、この経験から来ているのかもしれない。

こんなにも幸せに過ごした田辺での暮らしは、こうして終わつた。祖父母や伯母たちは、あんなに可愛がって育てた眞理子ちゃんに寂しい思いをした。しかし、子どもの順応性はすごいもので、私にとって、この別れは少しも悲しくなかった。今思い返すと、伯母たちに実にすまないと思うくらいに、あっけらかんとしていた。



当時のアルバムより。私と祖父の後ろに立っている着物の女性は、南方熊楠のお嬢さんの文枝さん。隣はご主人の岡本清造さん



入院していた母の病気が全快して、とうとう迎えに来てくれた日。しかし私はすっかり母の顔を忘れていたようだ



はせがわ・まりこ 独立行政法人日本芸術文化振興会理事長。専修大学教授、早稲田大学教授、総合研究大学院大学(総研大)学長などを歴任。専門は行動生態学、自然人類学。タンザニアでの野生チンパンジー、スリランカのクジャクなどの研究を行いながら、人間の進化と適応についても研究。主な著書に『美しく残酷なヒトの本性』『ヒトの原点を考える』『進化の人間考』など多数。

花を手向ける原点

地球上では、さまざまな動植物がたがいに助け合い、利用し合いながら生命を育んでいます。私たち人間もその環を形成する要素の一つです。生きものどうしの連環、そして、そこに関わる人間の役割がつくる〈輪っか〉について語っていただく、サイエンス・コラムです。

湯浅 浩史 (一財)進化生物学研究所理事長



シャニダール洞窟の埋葬地で花粉が発見されたタチアオイ

人 はいつから花を美しいと認識していたのだろうか。動物も花を知っている。

丹波篠山の山中の断崖にヒカゲツツジが生えている。ツツジとしては珍しい黄色の花が咲く。毎年四月下旬になると、サルが険しい崖を下り、その花を食べる。マダガスカル原産で白い体色が特徴のシファカもバオバブの花が咲くとやって来て食べる。動物の花の認識は食用のためである。

家族同様に暮らしているイヌやネコでも飾られている花に関心を抱くことは、まずない。

人類最初の花人

人類は猿人、原人、旧人を経て、花はいつから利用していたのだろうか。食物としての認識は猿人の頃からあったと見られるが、花と関わった確かな証拠は、ネアンデルタール人からである。イラクの北部、トルコとの国



アルメニアに咲くムスカリの野生種

類は花が美しい草花であった。列挙するとキク科のノコギリソウ属、ヤグルマギク属とセネシオ属、アオイ科のタチアオイ属、クサスギカズラ(旧ユリ)科のムスカリ属と低木のマオウ科のマオウ属である。

これらの植物は今もシャニダールには野生している。スイセン、チューリップやアネモネの野生種も分布しているが見い出されず、初夏から夏に咲くタチアオイが含まれ、いずれも花は美しい。出土した化石人骨の六万年前

は氷河期で気温が低かった点を考慮し、グーラン夫人は五月末から六月初め死去した男性をマオウの上に横たえ、花を手向けたと見た。同定された花や木はムスカリを除き薬用にもされるので、死者へ呪術的な供用も考えられるもののソレッキー博士はザ・ファースト・ピープル、最初に花を愛でた人びとと称した。

古代エジプトの供

死者に花を捧げる行為が歴然とするのは、エジプト王朝である。



1922年に発見されたツタンカーメンの墓。土砂に埋もれていたため、ほぼ未盗掘で残っていた

二十世紀の初頭に発見されたツタンカーメンの墓の玄室には南西の隅にヤグルマギクとオリーブで造られた花束、アカテツ科ミヌソプス・ラティフォリアの葉つき枝が立てかけられていた。ミヌソプスは前室の北東の隅にも立てられていた。この木はエジプト原産でなく、エチオピアやアラビア半島から導入、植栽されていた。生命の木として復活を願う葬送の儀式に重要であったに違いない。

ツタンカーメンの第二人型棺の内部はオリーブ、ブルーロータスやヤグルマギクの花びらを織った花飾りがリネンの布に縫いつけられていた。さらに黄金のマスクの襟飾りもパピルスに青いビーズと共にブルーロータスの花びらが縫いつけられていた。

ブルーロータスはしばしばハスの花と記されているが間違いで、ハスはエジプトに原産せず、プトレマイオス朝の以降に渡来した。ブルーロータスは青色の熱帯スイレンで古代エジプトの上ナイルの象徴花であった。

ヤグルマギクも青紫色の花を



ヤグルマギクも六万年前から死者を悼む花に用いられた

咲かせ、傷などに薬効がある。古代エジプトでは青は聖なる色として崇められ、青色の花が死者に手向けられたのであろう。リネン布のアマも青花である。

死者に花や花束を手向ける風習は、ギリシャ、ローマ時代を経て広く西欧に伝わり、今日に至る。



ゆあさ・ひろし
1940年生まれ。農学博士。東京農業大学教授を経て、(一財)進化生物学研究所理事長・所長に就任。朝日新聞のコラムをまとめた『花おりおり』ほか著書多数。



2002年当時の研究所

二〇〇二年コスモス国際賞受賞者

The Charles Darwin Research Station

チャールズ・ダーウィン研究所

南米エクアドルから約千キロメートル西の太平洋に浮かぶ群島・ガラパゴス諸島は、「進化論」で知られる英国の生物学者チャールズ・ダーウィンがフィールドワークを行い、その調査をもとに革命的著作『種の起源』を発表したことで有名になった場所。この地で六十年以上にわたり、ガラパゴスにおける生物分布と生態の研究、固有生物の保護や種の回復、外来種の駆除、環境教育など多角的な活動を行ってきたのが、チャールズ・ダーウィン研究所です。学術研究と自然保護を両輪で回し続ける彼らの活動は、世界中の人々に地球上の生命とその進化について考える契機を与えています。

チヤールズ・ダーウィン研究所は、国際的なNGO・NPOであるチャールズ・ダーウィン財団（本部：ベルギー・ブリュッセル）によって一九六四年、ガラパゴス諸島の中心に位置するサンタクルス島南岸のプエルト・アヨラに設置されました。

ダーウィンが「進化の実験室」と呼んだガラパゴスの島々には、その地理的要因から、巨大ゾウガメやウミイグアナなど独自の進化

を遂げた固有種が豊富に生息していました。ところが20世紀前半から入植者が増加し、固有生物の減少や生態系の破壊が急速に進行。この危機に対し、ユネスコ（国連教育科学文化機関）、IUCN（国際自然保護連合）などの支援を受けて一九五九年に誕生したのがチャールズ・ダーウィン財団です。

財団の設立に先立ち、ガラパゴスを統治するエクアドル政府は住民の居住地を除く陸地面積の九七



「2002年（第10回）コスモス国際賞」受賞時の研究所所長と研究員。左から2人目が、所長フェルナンド・エスピノザ博士

【コスモス国際賞】

地球の航路を探る

「自然と人間との共生」のため、統合的視点により環境と生命体・生命体同士の相互的作用等を研究した業績に与えられる「地球生命学」ともいうべき国際賞です。

受賞のポイント

- ◎共生の理念の形成、発展に寄与すること
- ◎地球的視点に立ち、長期的な視野をもつこと
- ◎統合的な視点での研究や活動であること

パーセントを国立公園に指定（その後、海洋部分にも自然保護区を拡大）。政府と財団の間で協定が結ばれ、研究所の「進化の実験場」を守る活動が始まったのです。

ガラパゴス諸島とは

ガラパゴス諸島は海底火山の噴火により誕生した火山島です。そのため大陸と地続きになったことがなく、また太平洋に向かって吹く貿易風や、大陸からガラパゴスに向かって流れる海流などの影響で、何らかの方法で島に辿り着いた生物はどこへも移動できず、隔離された状態で環境に適応してい

った結果、独自の進化を遂げたと考えられています。ユネスコの「世界自然遺産」に登録された最初の島でもあります。

ゾウガメの繁殖から生態系の復元を試みる

研究所が最初に取り組んだのが、ゾウガメの保護増殖事業でした。ゾウガメは摂食と種子散布により植生の循環を促す「生態系の守護神」的存在でしたが、長年にわたる海賊や捕鯨船の乗組員による乱獲、入植者などが持ち込んだヤギやブタといった家畜との食料の競合などにより、多くの島で固有の亜種（※1）が絶滅、残った種数も限られるほどになっていました。

絶滅を逃れた島で特に危機的だったのがピンソン島とエスパニョーラ島で、ピンソン島では子ガメは全て外来動物のクマネズミに捕食され、確認できたのは成体百頭のみ。エスパニョーラ島はメス一二頭とオス二頭を残すのみとなりました。この状況に対し、研究所はピンソン島からは卵を、エス

パニョーラ島からはすべての個体を持ち帰ってつがいをつくり、さらにサンディエゴ動物園から雄ガメを連れてきて繁殖を促進。人工飼育を行って何千頭もの子ガメをそれぞれの島に戻すことに成功したのです。

さらに一九九〇年からは、ゾウガメの餌となる植物を食べ尽くしていたヤギの捕獲を本格化させ、全島での駆除に成功。環境保全に、ゾウガメの帰還による生態系の復元という新たな道筋を示しました。（※1）二〇〇九年から「ガラパゴスゾウガメ種群」に分類

生きた環境教育で未来に希望の種をまく

「ガラパゴスがどんなところなのか、なぜそのような特別な場所で生活しているのか、理解を促進しなければ、若者たちは将来、自分たちの故郷を守っていくことは思わないでしょう」。

二〇〇八年に日本で行われたシンポジウムで、当時の所長グラハム・ワトキンス博士はそう語りました。この言葉を体現するよう

に、研究所では三つの島で独自の教育機関（※2）を運営し、地域住民を対象に体験学習や研究所のリソースを活用した学校教育の補完授業を行うなど、環境教育にも力を入れてきました。

ガラパゴスでは、一九七八年の「世界自然遺産」登録を機に観光地化が加速し、外来種の運び手となる人の往来が増加。海では島民による輸出目的のナマコやサメの乱獲が続く、二〇〇七年には「危機遺産リスト」に登録される事態に。しかし島の人々は、経済発展とひきかえにそのまま環境破壊の道を進むのではなく、自然と共生することを選び、二〇一〇年にリストから脱しています。その背景には、エクアドル政府の法整備に加え、研究所の環境教育活動の影響があったことは間違いありません。

（※2）二〇〇九年より政府機関との共同事業

ガラパゴスの取り組みを世界の保全活動の道標に

チャールズ・ダーウィン研究所がコスモス国際賞を受賞してから



地道な基礎研究と飼育技術の進歩により人工飼育によるゾウガメの生存率は95%に



監修
村井良徳

はかない雪のような「日本のエーデルワイス」 ウスユキソウとその仲間

日本列島には約5,000種類の在来植物があるといわれていますが、開発や乱獲、外来種の侵入や気候変動などの影響で、その生育地や個体数は減少しています。花博記念協会は、こうした在来植物の現状を調査し、植物本体を採取することなく動画で記録しました。今では生育していない、失われた地域もありますが、その成果は「プラント・フォト・ハンティング」として、協会ホームページで公開しています。このコーナーでは、貴重なデータの中から、特徴的な種を取り上げて紹介します。

*学会や展示会などへの動画(DVD)の貸し出しもしています。 <https://www.expo-cosmos.or.jp/main/pph/index.html>



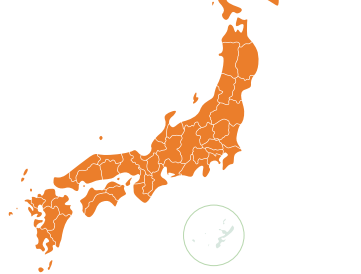
秋田駒ヶ岳をはじめ、東北地方の山地帯頂上付近に生えるミヤマウスユキソウ

学名: *Leontopodium japonicum*

分布: 北海道、本州、四国、九州、中国(四川、雲南)、ヒマラヤ、ヨーロッパ

開花期: 7~8月頃

日本(国内)の分布



早池峰山のハヤチネウスユキソウ

ウ スユキソウはキク科ウスユキソウ属の多年草。変種やさまざまな品種を含めると、北海道から本州にかけて広く分布しています。開花時期は七月八月頃ですが暑さには比較的弱く、標高がやや高めの山地や亜高山帯の岩場などに生育し、草丈はおよそ二十五〜五十センチ。白い星型の花弁に見えるのは葉が変形した苞葉で、その中心に数個集まっているのが頭花です。苞葉には細かな綿毛が密生し、全体が薄く雪をまとったように見えることから「薄雪草」という名がつけられました。

アルプスの名花として知られるエーデルワイス(セイヨウウスユキソウ)もウスユキソウの仲間です。ウスユキソウは、日本でも多彩な種類が点在。例えばコウスユキソウは、奈良県の大峰山系と四国や九州の一部の山地に分布し、その名の通り全体的に小型で、小さな花を咲かせます。東北の高山、飯豊山、月山、鳥海山、秋田駒ヶ岳などに生えるミヤマウスユキソウは、花をつけにくい側枝の先に根生葉を口

キソウ)もウスユキソウの仲間。チロルやバイエルンでは高山帯にしか咲かないので、持ち帰ると上まで登った証になると言われています。もちろん山の植物を持ち帰るのはルール違反なのでご注意ください。またウスユキソウ類はユーラシア大陸を中心に中国の四川、雲南、ヒマラヤにおいても広範に見られ、日本でも多彩な種類が点在。例えばコウスユキソウは、奈良県の大峰山系と四国や九州の一部の山地に分布し、その名の通り全体的に小型で、小さな花を咲かせます。東北の高山、飯豊山、月山、鳥海山、秋田駒ヶ岳などに生えるミヤマウスユキソウは、花をつけにくい側枝の先に根生葉を口

二十年余。ガラパゴスが抱える課題、特に海洋における問題は国境で区切れるものではなく、研究所はこの間、科学研究と保全活動を東部熱帯太平洋全域へと拡大してきました。

また現在、ガラパゴスの自然史コレクションやゲノム技術を用いたラボ、高解像度リモートセンシング、海洋観測プラットフォームを有する重要な研究拠点として、この地域で最も包括的な長期生物多様性データセットを維持しており、現所長である熱帯復元生態学者ラカン・A・ザハウイ博士のもと、研究所が科学と政策、ガラパゴスの人びとと結ぶハブとなることを目指して戦略的な五つの活動を



子どもたちにマングローブの胎生種子を見せながら説明する研究員。環境教育の学習視点としても、自然と地域をつないでいる



ラカン・A・ザハウイ博士。自然環境が人間活動によるさまざまな脅威にどう耐えうるかを生涯かけて探求してきた



を展開しています。ザハウイ博士は言います。「生態系の再生は単なる技術的な問題ではなく、信頼と協力、長期的なビジョンが不可欠な社会的取り組みです。ガラパゴスは世界中の環境問題が凝縮された小宇宙であり、独創的で最先端の再生アプローチを地域の人々とともに実践する『生きた実験室』でもあります。この地で得た知見が世界各地の保全活動の道しるべとなることを願っています。」

叡智の人の足跡

1957年、ガラパゴスに生息する固有生物の著しい減少を受け、ユネスコは鳥類学者のロバート・ボウマンと動物行動学者のアイブル・アイベスフェルトを現地に派遣し、調査を実施。両博士からより強力な保護施策と研究機関設置の必要性が提言され、これが、チャールズ・ダーウィン財団および研究所設立の発端となりました。

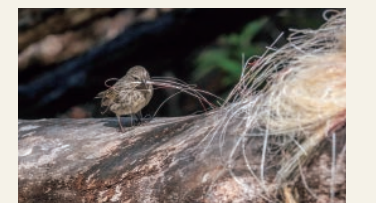
研究所の開設にあたっては、アメリカ、イギリス、ドイツ、エクアドルをはじめ世界各国から研究者が結集。植物・陸上無脊椎動物・脊椎動物・海洋生物など各部門にわたる調査体制が整備され、保護繁殖だけでなく学術的な調査・研究機関として

一步を踏み出します。最初にゾウガメの保護と繁殖を成功させると、1990年からはガラパゴスの生態系に著しい影響を及ぼしていたヤギの駆除を本格化。さらに外来植物の監視や寄生バエなどの侵略的昆虫の生物防除、海洋生物の調査と保護などを展開する一方で、研究、教育の面でも功績をあげ、ガラパゴスにとってなくてはならない存在となっていきます。

近年はゲノム技術を取り入れた絶滅種の復元にも注力。政府、他機関と共同で取り組む「フロリアナ生態系復元プロジェクト」においては、19世紀半ばに絶滅したフロリアナ島のゾウガメの繁殖に成功し、2026年2月、158

頭が180年ぶりに島への帰還を果たしました。

2世紀近く前にチャールズ・ダーウィンが目にした光景をガラパゴスの全ての島と海へ。財団と研究所の進化の歩みが止まることはありません。



ガラパゴスを代表する鳥の一つ、マングローブフィンチ。残っているのは100羽未満といわれ、もはやイザベラ島のマングローブ林にしか生息していない。絶滅を防ぐべく、研究所によって監視・保護が続けられている

大阪の街並みを桜で彩る
美しいプロジェクト

万博の桜二〇二五は、公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会、大阪府、大阪市が事務局を担い、令和二年春から募集を開始したものです。

このプロジェクトは、安藤忠雄大阪府・市特別顧問（建築家、東京大学名誉教授）の発案で、大阪・関西万博が開催される大阪の街を桜で飾り、世界の人を迎えよ



普及啓発事業

万博の桜二〇二五

万博の桜二〇二五は、二〇二五年日本国際博覧会（以下「大阪・関西万博」という。）に向けて、万博の機運喚起と関西の街の緑化を目指し、一般府民、市民の寄附等により二千二十五本の桜を植樹するというプロジェクトです。大阪府内を中心に植樹を行いました。

うと考えたのがきっかけです。これに吉村洋文大阪市長（当時）が賛同、当協会理事長角和夫（当時）も加わり、令和二年一月二十九日に大阪府庁にて実行委員会設立総会を開催。設立趣意書及び会則、役員、全体事業計画を決議し、体制が整いました。事務局本部である当協会は、寄附金の受入れとポスターやチラシの作成、各ターミナル等への配架依頼、大阪府は府内自治体との調整を含む植樹地の選定やPR、大阪府は植樹地の選定やPRを担当しました。

多くのマスメディアでも
話題に

スタートに際しては、寄附に係

る免税措置や入金システム作りには奔走しましたが、大阪国税局より公益性が認められ「国等への寄附」の扱いで承認をいただき、令和二年四月一日から募集を開始。当初は、二千二十五本のうち千七百本を寄附によるものとし、二億五千五百万円（十五万円／本）を目額に設定。残り三百二十五本を民地による植樹としました。また、寄附者の氏名を記載したプレート添え木に貼付けることをインセンティブとしました。

同年十一月二十一日はプロジェ



クトを大々的に宣伝するため鶴見緑地で植樹式を開催。井上信治大阪・関西万博担当大臣、安藤実行委員長、吉村知事、松井一郎市長、石毛博行大阪・関西万博協会事務総長、角花博記念協会理事長（※当時の役職含む）、聖乃あすか宝塚歌劇団花組（万博アンバサダー）他四名が参加され、多くのマスメディアに取り上げていただきました。

コロナ禍を乗り越えて
目標とする寄附額を達成

寄附は、新型コロナウイルス感



【開催趣旨】

2025年に開催される関西・大阪万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとして開催されるもので、人類と地球のより良い関係を提示するものとして準備が進められています。

大阪はこれまで1970年と1990年に万博を開催し、それぞれの時代を象徴する「人類の進歩と調和」「自然と人間との共生」というテーマを掲げ、成功させてきました。このような中において2020年は関西・大阪万博の開幕五年前にあたり共に、70年の万博から50年、90年の花の万博から30年の記念の年になります。

この節目を捉え、2025年の万博への期待感や機運を高めるため、大阪府内を中心に2025本の桜の植樹を実施します。具体的には、募金一口一万円で個人、法人の皆様から幅広くご寄附をいただき、集金した金額を大阪府及び大阪府に寄附し、その資金を基に大阪府域の公園や道路、河川敷、学校などを中心に、植樹を行い、ご寄附いただいた方のお名前はプレートに記します。

万博へのエールの桜が、2025年の万博後も毎年花を咲かせ、大阪のまちを彩ると共に、人々の心にレガシーとして残っていくことを念願し、本プロジェクトを実施いたします。

染症の影響があり、伸び悩む時期がありました。大阪・関西万博の開幕が近づくに伴い、本プロジェクトの趣旨が浸透し、令和六年十月に目標額を達成。最終的には、寄附金による植樹千五百二十二本（現物寄附三百五十四本含む）、民地等での植樹が五百三本、寄附金額一億九千二百万円円余となりました。

桜の種類は、内陸部に「ジンダイアケボノ」、臨海方面に塩害に強いとされる「オオシマザクラ」を植樹。また、木が容易に枯死しないこと、万博までに花を咲かせ

ることを考え、幹回り十二センチメートル程度、樹高三メートル程度の苗木を選定しました。

寄附者の声として、「夫婦の名前をプレートに刻みました。」「自分の名があるプレートの桜は愛着が湧きます。」「母の車いすを押して見に行きます。」「孫の名をプレートに。孫の成長と桜の成長が楽しみです。」等が寄せられました。この万博の桜二〇二五の木が、大阪・関西万博の文化、自然のレガシーとして未来につながり、多くの人の憩いとなることを願っています。

編集後記

日本人は生物・無生物を問わず、万物に魂が宿ると考え、供養を捧げてきました。しかし、道端に佇む供養塔の由来を知る人は、今や稀です。それでも、「おかげさまで生きています」と自然に手を合わせる感謝の姿勢は、自分以外の存在に目を向け、謙虚になる利他と配慮の心です。石碑に込められた祈りが風化することなく、これからも自然と人間との共生の道を静かに照らし続けることを願っています。

（花博記念協会 K.S）

『KOSMOS』の誌名にこめた思い

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。

椿

日本の文化と精神に
深く根付く、
世界に誇れる、
優美な伝統花木

冬から春にかけて満開を迎える日本原産の代表的な常緑花木、椿。厳しい寒さの中、凛と咲く艶やかな花の姿は人々を魅了し、冬の景色を華やかに彩ります。その美しさと実用性から、古来より日本人の生活に深く根付き、歴史的にも文化的にも、非常に重要な位置を占めてきました。

ツ

バキ *Camelia x hortensis* は、ヤブツバキ *C. japonica* と中国の椿属植物間の雑種起原の園芸植物。ヤブツバキは日本列島に自生する常緑樹で、縄文時代から種子の油を採取して灯明、食用、化粧品等として人々の生活に深く関わっていました。奈良時代には『日本書紀』や『万葉集』に神聖な樹木として登場しますが、平安時代に入ると、椿の記載はほとんどなくなり、茶道において千利休が「侘助」を愛用したとよく言われますが、信憑性のある茶会記に椿はなく、侘助の名前が歴史に現れるのは一六九五年が最初です。

椿という花そのものが人々に知られるようになるのも、江戸時代初期以降。家康、秀忠、家光の徳川三代はこの花を愛好したという資料が残されています。一六三〇年に書かれた『百椿集』によると一六一五年秋から品種が急激に増

えたとき、絵巻物『百椿図』をはじめ、宮内庁の『椿花図譜』には七百以上の椿品種が描かれています。この頃、関西の上流階級においては空前の椿ブームが到来。ブームは十七世紀後半に庶民にまで広まり、上方から江戸に中心が移り、江戸時代を通じて続きました。椿は花だけでなく、変わり枝や変わり葉も珍重されました。枝が左右に屈曲しながら伸びる変わり枝は三河雲竜と呼ばれ、葉は斑入りや、先端が金魚の尾びれのように変化したものも登場しました。このような椿の流行は、その後、躑躅や楓、朝顔など江戸の園

芸ブームにもつながっています。上方や江戸で一世を風靡した椿ブームは肥後椿など地方にも広がり、そして一七一一年に大量の椿品種が中国に輸出され、中国を経由してあるいはオランダを通じ十八世紀後半からヨーロッパに生きた椿が紹介され、ジャポニスムに先立つ一八三〇年頃にヨーロッパの上流階級でも椿ブームが起き、現在に至っています。

(監修・田中孝幸)

花の少ない初春を彩る 世界に誇る日本の椿

表紙の解説

「鶺鴒黄 ひわもえぎ」

鶺鴒黄とは明るく黄みの強い黄緑色で、小鳥の「鶺鴒」の羽のような黄色がかかった鮮やかな緑色(鶺鴒色)と、春の若葉のような明黄色(鶺鴒色)と、江戸時代中期に流行した伝統色で、その鮮やかさから顔映りを良くする色彩として、化粧や帯揚げの差し色などに好んで使われた。

〔写真〕蔵王の山並み(山形県山形市)、立石寺のせみ塚(山形県山形市)、水田(山形県長井市)、アマガエル、ヨモギ



紅ト伴(日光)京都市霊鑑寺



錦魚葉椿 埼玉県国営武蔵丘陵森林公園

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

情報誌 KOSMOS——こすもす

第17号

2026年3月31日発行

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号

TEL:06-6915-4500 FAX:06-6915-4524

URL: <https://www.expo-cosmos.or.jp/>

制作協力 株式会社アサク

©Expo'90 Foundation All rights Reserved